
愛しの魔王様

紅虎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛しの魔王様

【Nコード】

N5987X

【作者名】

紅虎

【あらすじ】

宮本夏樹27歳。アラサーにて異世界トリップつてやつを経験しました。しかも結婚まで。相手は一国の王様で・・・見た目が5歳児だとしても、そこに愛があれば何も問題はないわ！軽く下品にラブコメデー。偶にシリアス。気まま更新となります。

花嫁ですけど何か？1（前書き）

少し年齢層高めの主人公となっております。シヨタ・シヨタコン要素あり。

苦手な方はお控え下さい。

花嫁ですけど何か？1

チツ チチツ

軽やかな小鳥の囀りが朝の訪れを知らせる。

朝霧も捌け、草木からは瑞々しい露の濃厚な香りが匂い立ち、清らかな空気がしつとりと肌を刺激する。

しかし、朝の職務に向けて人々の動く気配が濃くなる中、ガラス一枚隔てた王宮の一室では淫靡な空気が蔓延していた。

様々な意向を凝らして整えられた高級感漂わせる椅子に重なり合う二つの黒い影。

大小大きさの違うそれらは向かい合うように身体を寄せ、クスクスと囁き合う。

「もう、ダメだよ。誰か来ちゃっう・・・」

子供御特有のソプラノボイスが身体に響き、淡い息遣いが捕らえていた捕食者の気分をより高揚させる。

「大丈夫よ。まだ来ないわ。それよりも・・・ね？」

「あつ、・・・折角服、着替えたのにい」

「乱れたならまた整えればいいわ」

「仕方ないなあ。ちょっとだけ、だよ・・・？」

「ふふふ、ほら大きくお口あけて？」

頬を染め潤んだ瞳で見上げる少年。

恥ずかしがりながらも、言われた通りに小振りの口を大きく開け、唇から覗く真つ赤な舌がなんとも愛らしい。

女は頬に添えていた手を下げ、そのまま首筋を一撫でしただまだ未発達な身体を伝いながらゆっくりと固く閉ざされた釦を外す。

空いた手で小さな唇にそれを近づけ、

「はい、ルーあゝ失礼します。ルーファウス様、朝議のお時間が迫っております」ん

狙ってましたと言わんばかりに被さる第三者の声。

チツ今日も来たか。

突然の訪問者によって、部屋に籠っていた甘ったるい空気が一気に拡散した。

あーあ、私の憩いの一時が・・・

ガツクリと頂垂れながら扉に目をやると其処には灰色の美女・・・

じゃない。

青鈍色のローブに身を包んだ、なんかもう色々神への冒瀆としか思えない間違った容姿をした男が立っていた。

出たな小姑！

キツと目を吊り上げた私の威嚇もなんのその、男はワザとらしく溜息を吐き膝の上に乗っていた子供こと、愛しの旦那様を抱き下ろした。

あゝんっルー

奪われた温もりに、手を伸ばし精一杯の不満をアピール。

そんな私に苦笑しながらも、ルーは降ろされると手を引き寄せスプーンに乗っていたシリアルをパクリ。

モグモグと口を動かす姿はまさに小動物。

ああ、幸せ！

今日も一日ハッピーに過ごせるわ！

「いい加減朝食ぐらい普通にお取りになりませんか？」

「旦那様とイチャイチャして何が悪いんですかー」

ブーブーとブー垂れる私。

因みにこの旦那様って言うのは雇用関係上の呼び名ではない。れっきとした、夫・主人・ダーリン（ハート）なのだ。

10日前に式を挙げたばかりのラブラブ（死語？）な新婚生活を送っていると言うのに、何故か毎度毎度タイミング良く邪魔が入る。やれやれと灰色の侵入者改めゼノンが首を竦め、

「毎日飽きませんねえ。」

「ええ、まだ結婚して日も浅いですから。（こっちとらまだ新婚なんだよ！蜜月の夫婦の邪魔すんな！）」

「それにしても随分と清い関係のようですが？」

「そんなことはございませんわ。夜は必ず共寝致してますから。（セクハラ反対！セクハラ反対！）」

「おや？もしかして御存知ないのですか？一緒に眠るだけでは御子は出来ませんよ？」

「勿論存じておりますわ。けれど今は陛下の負担になるような事は避けるべきかと思ひまして（ノーマルからアブノーマル、男性向けから女性向けまで熟知してるっつーの！日本生まれのオタク舐めんなよ！）」

「そうですか。もし手解きを御求めでしたらいつでも私が御相手して差し上げますので、おっしゃって下さいね」

「まあ・・・！（掘られる受け顔！！）」

〇し時代に鍛えられた愛想笑いもいい加減疲れた。口の端がピクピクする。

ってかゼノン相手に今更外面も何もないんだけどね。

「ゼノン、ナツに手出したらダメだよ。ナツは僕のなんだから」

いつの間にか崩れた衣装を侍女のメアリーに整えてもらいながら、ルーは目線をこっちに向けて私とゼノンのやり取りを見て笑っている。

あっ！それ私がやりたかったのに！！

ゼノンは笑みを零しながら一礼して、私から一步下がった。

もうっルーに対してはイイ子ちゃんなんだから。

「ナツも、ゼノンに近づいちゃダメ」

「きゅん！」

返事の代わりに口からトキメキが溢れてしまった。

仕方がない、いつものことだ。

ルーもそれを分かってか、楽しそうにクスクス笑っている。

この笑顔がとってもキュートな麗しの少年こと、ルーファウス・デイラ・ヴァルネシア（通称ルー）は此処カルヴァルド国の王様だつたりする。

常に笑顔を絶やさない美少女かと思う面立ちに襟足の少し長い艶やかな黒髪、子供特有のクリツとした金色のお目めがなんとも愛らしく、母性本能直撃。

見た目は5歳児程度の姿なのに、これで私よりも年上とか驚きだ。そしてさつきから何度も言ってるが私の夫。

これ重要。

私の旦那様、なのだ。

いやー自分でもこんな（見た目の）小さな子に手を出すとは思わなかった。

世の中何が起こるか分からない。

そして、可愛いものが大好きな私はこの可愛いがデフォの夫に暴走する事もしばしば。

惚れた弱みと言うやつなのか、普段はそれなりに常識を持って生きている私だが、ルーには滅法弱い。

これぞ恋の魔力！

で、そんな私のルーに対してのセックスアピールをことごとく潰してくれるのが、ゼノン・シエラ・ルナウド。

この国の宰相で、20代半に見える容姿に灰白色の髪と海底を思わすような深い蒼瞳が特徴。

何より顔の造りが大変整っていて、美形・・・と言うか美人。

この国では綺麗な容姿をしている人がとてつもなく多いが、その中でも群を抜いてトップクラスに入るだろう美貌の持ち主である。

そして何を隠そう、この宰相様恐ろしい程の女顔なのだ。

傾国の美女って言葉はゼノンの為にあるような言葉に違いない。

確かにとんでもなく綺麗な人だとは思うけど、私から見ればルーが一番なので、「ふん」って感じ。

それを本人に言うと、「貴女のような方は初めてです」って酷く喜ばれた。何で？

180まではいかなくても170後半はありそうなスラリとした身長。

身体もある程度鍛えているのか、ムキムキマッチョではないが細マッチョってやつだ。

華奢な身体つきなのに脱いたら凄いです系？

無駄な脂肪の一切ない均等のとれた身体は私に対する当て付けか？
男に見えないかと言われたら見えなくもないが、やっぱり女性と
言われた方がしっくりくる。

だってゼノンってばいつでもどこでも濃厚なフェロモンを身に纏
てて、何をするにも何とも色っぽいよね。

きっとゼノンが微笑めば大概の男は前屈みになって悶絶すること
間違いないだろう。

・・・ヤバい、少し見て見たいかも。

雪のように白い肌に切れ長の瞳。

緩く束ねられた髪は光りの当たり具合によってキラキラ輝いてい
て。

ある意味歩く公害。大輪の薔薇さえもゼノンを目の前にすると霞
んで見える。

ホントこれで男って言う方が間違ってるわ。

でも初対面で無理矢理股間触らせられたから否定の仕様がな

いら若き乙女になんてことすんの！

出会った当初はその迫力に圧倒されて、例え男だとしてもこんな
美人さんが本気になつたら私なんて絶対勝ち目ないじゃないか。

ルーを寝取られる、と夜な夜な涙で枕を濡らしていたがゼノン曰
く、

「私が陛下と寝所を共にするなんて無理ですよ。格が違い過ぎます。
・・・まあ、声が掛ければ真っ先に行きますけどね」

やっぱりアンタ男もイケる口じゃないのー！！

取りあえず私の中でのゼノンの立ち位置は、天敵・変態・姑・セ
クハラ魔 以上。

着々と身嗜みを整えていくルーを見ながら、お行儀悪くデザート
のフルーツをひょいっと手に取る。

ラツと言う果実で、見た目がリンゴのように赤く、味はモモとオ
レンジの間でとってもフルーティー。

食感がシャリシャリしてて美味しい。

狙っていた作業を取られて悔しかったけど、さっきのセリフは良
かった。

僕のなんだから

僕のなんだから

僕のなん（ry

脳内リフレイン。

ルー！それは不意打ちよ！！

身悶えている内にいつの間にかルーは仕上げの段階。

胸元のリボンを綺麗に直してもらつと、くるりと振り向いてにっ
こりエンジェルスマイル。

「ナツ、夕食は一緒に食べよ？僕頑張ってお仕事終わらせてくるか
ら」

ね？っと小首を傾げる仕草は小動物さながら。

はっつ！

な、なんなの？！この可愛らしい生き物は！！

サツと光よりも早くルーを抱き上げてその柔らかなほっぺに全力で頬刷りをする。

ルールールー！！

「わっ！くすぐったいよー」

きやつきやと笑う天使。

ああ！もう大好き！大好きよ！ルー！！

邪な私の手が悪戯してしまうのを許して！

「ルーファウス様、お時間です」

「あ！」

再び私が服を乱してしまふ前に、またもやルーを奪うと姑ゼノン
はニッコリと笑みを残し颯爽と部屋から出て行った。

クッソ！

覚えてろよゼノン！

ルーはそんな私に苦笑しながら扉の前でちよっぴり背伸びをし、

「じゃあ、行ってきます僕の奥さん」

「行ってらっしゃいませ旦那様」

少し背を屈めて、ちゅっ之行ってらっしゅいのキスをする。

夫婦たる者、おはよう・行ってきます・お帰りなさい・頂きます（夜的な意味で）・ごちそう様（夜的な意味で）・おやすみなさいのキスは当たり前だ。

むしろ舌を入れなかった私は賞賛に価するのではないだろうか。ちなみに夜的な意味でのキスは濃厚に絡ませます。常識でしょ。

最愛の旦那様を送り出して、メアリーに食後の紅茶を入れて貰う。毎日のことだから手馴れたもので、さっきまでのやり取りに臆することなく淡々と彼女は仕事を熟す。

この世界に来てもうすぐ一ヶ月、か・・・

私、宮本夏樹は27歳にして異世界トリップってやつを体験した物語だけの現象かと思っていたのに、まさか自分がしてしまうとは・・・

しかもこの年で。

トリップだなんてもっと若い子がするもんだと思っていたけど、意外とアラサーでも出来てしまうものなのね。

いやはや驚いた。

そして驚きついでに、異世界に迷い込んだものの私は本当に普通の一般人だ。

やれ精霊に好かれていたとか、動物と会話が出来るとかそういった特殊能力なんてものはこれっぽっちもなく、残念ながら人に自慢できる特技なんてものすら持ってない。

本当に普通の・・・ちよっとオタクの入ったただの一般人なのだ。どうしてこうなったのかなー

人より秀でてる事なんて、ただ無類の可愛いモノ好きってことぐらいで・・・。

あ、違った。これは引かれる事だった。

パツと冴えない私の趣味と言えば可愛い物を収集&愛でる事と、あと読書ぐらい。

アラサーだって、フリフリのロリロリのシヨタシヨタが好きだったりするんですー。

良いじゃないか、誰にも迷惑掛けてないんだし。

犯罪を犯すようなことはしてないもん。

ただ見てるだけ。

ただ飾るだけ。

ただ心のお家で疑似家族築いてるだけだもん。

誰にも文句は言わせない。

それに“読書”って言うのもまあ外向きの建前で、インターネットが普及しているこの時代、誰でも簡単に手を出せるネット小説をそれはもう貪欲に日頃のストレスを全てぶつけるかのごとく読みまくってきただけだし。

B LだろうがG LだろうがN Lだろうがお構いなし。

来たれ！18禁！！

気になったものは片っぱしから読み漁って、それこそ異世界トリップの話も沢山読んだ。

異種族？執拗？年の差？大好物ですけど何か？

何時間でも読み続けられる自信あるわ。

お蔭でネット充な私は滅多に外出などすることはなく、お肌は真っ白。

若干不健康がたかつてか青白く見えなくもないが、まあ今は美白の時代だからね！

青白いなんて流行の最先端じゃないか！とか訳の分からない言い訳をし、完璧に引き籠り予備軍の要素は十分に備わっている。

勿論恋人など居るはずもなく、独り身歴5年目に突入してしまいました。

いやね、昔はそれなりに居たのよ？

自分で言うのもなんだけど、身長は160cmジャストの標準体型。でも出るところ出てるし、男友達からはエロ顔ってよく言われてたし。・・・あれ？これって褒め言葉か？

黒目勝ちのくっきり二重の目に、ぼつてりした唇。

背中の中ばまである髪はちよつと前までミルクティー系の色を入れていたが今は黒に戻して、緩くパーマをあててある。

そして両親が揃いも揃ってベビーフェイスなもんだから、100%その血を受け継いじゃって童顔を超える超童顔。

27にもなつてすっぴんでR-18のゲームが買えないってどう言うことよ。

友達にはいい年した大人がそんなもの買つな！って言われるけど、いい年した大人だから買うのよ！

いいじゃない、好きなんだから。

けど通販ならともかく、店で購入しようとするといつも証明書の提示求められるのが悔しくって、少しでも大人っぽくなれるよう必死になって化粧の勉強をした賜物か、今じゃヘアメイクアップアーティスト並みの腕を手に入れたわ！

・・・私ただの隠れオタのOLだったのに・・・

そんな私も年々人との付き合いが面倒になって、お一人様を堪能していたらいつの間にか結婚適齢期ってヤツに自分も突入しちゃってて。

周りが次々に結婚して子供を産んでいく中、未だ一人身ですつと家に引きこもっているもんだから、親や職場のお節介な先輩達からもっと積極的に外に出る出会いは家の中に転がっていないって突っ突かれるんだけど、どうにも気分が乗らない。

けどそれを無視しようにも、何故か先輩方には「この引きこもりを外に連れ出すぞ」と言う使命感のような物が出来てしまったように、正直有難迷惑な話だ。

あまりにもとやかく言われるもんだから、渋々先輩がセツティングしたコンパに顔出したりするけど、なんか“違う”のよねー

何が違うと聞かれたら困るけど、“違う”としか言いようがない。それを言くと、「恋愛には多少は妥協も必要だ」とバツサリ切り捨てられた。

ちなみに結婚にはもっと妥協が必要なのだとか。

うつつ、そんな事言われたら結婚生活になんの光もないじゃない。

現実はどうであれ、もうちょっと夢を見せてくれてもいいと思っ

鬱々したものを抱えながら、その日も例に漏れず仕事から帰ってパソコン立ち上げてお気に入りの作家さんの小説読んでホクホクお風呂に入って、寝る前にちょこつとだけまた小説読んでそのまま寝落ちした。

パソコンをベッドに置いて一緒に添い寝していたもんだから、落ささないか気がかりだったけど、疲れていたのか一気に深い眠りについた。

で、次に目を覚ましたら見知らぬベッドの中。

「どこ、どこ・・・？」

大の大人が優に五人は寝れるような広々としたベッド。

掛けられたシーツは私が使っているものとは比べようのないぐらいサラリと大変手触りがよくって、これはもしかしたらシルクじゃなかるうか？

ってかなんで私こんなところにいんの？

一瞬どこかのラブホか？とも思ったけど、残念ながら一緒に行く相手が居ない。

酔っ払らって・・・との事も考えたが、ここ最近お酒飲んでないし、寝る前は確かに自分の部屋でパソコン抱いてゴロゴロしていたはずだ。

いつものライフワーク間違える訳が無い。

状況を知ろうと、パシパシ何度か瞬きを繰り返して、漸く暗さに目が慣れて来た所でふと自分の隣りに誰かがいる事に気付いた。

誰・・・？

大人にしたら小さすぎる膨らみ。

相手を起こさないようにそーっと顔を覗き込んでみると、静かに眠る黒髪の子供の姿があった。

見た感じ5、6歳といったところだろうか。

小さな、まだまだ親の庇護が必要な年頃の子供。

第一部屋人（？）発見ー

それが私とルーの初めての出会いだった。

花嫁ですけど何か？2

空に浮かぶ大きな月。

一寸も欠けたところがないのをみると、どうやら今日は丁度満月のようで、窓から煌々と降り注がれる月明かりの淡い光が子供の伏せられた長い睫に影を落として優しく包み込んでいた。

まるで映画のワンシーンのような幻想的な雰囲気の中、怪しく蠢く影は勿論……

私、ですよねー。

小さな動物や可愛いものがこの上なく大好きな私にとって、隣で眠る子供は格好の餌……じゃない、愛玩対象な訳で。

うわー唇ちっちゃーい

やーんっほっぺっぺっぺっ

自分が置かれている状況をフツ飛ばし、欲望のままちよっかいを出しまくっていた。

いや、だってね？こんな小さい子と触れ合う機会なんて滅多にな
いから。

子供ってホント可愛いなあ〜

上から下へ。

表から裏へ。

相手に意識がないのを良いことに、あれ？これって犯罪じゃね？
と思われるギリギリラインを一通り撫で繰り返し、その柔らかさを
堪能する。

ああ、若いって素晴らしい。

この弾力堪らんね。

ってか、

「中々起きない子ね」

普通これだけ弄られたら、何らかの反応はすると思っただけど、
身動き一つせzugつすり。

子供ってこんなもんだっけ？

「ねえ？ちよつと起きて〜」

別に部屋を出て一人で探索しても良かったんだけど、此処は見知
らぬ方のお家。（しかもこのベッドを見る限り豪邸とみた）

これでも一応謙虚さが売りの日本人だから、勝手に動くのも憚れ
るし、不法侵入で見つかって騒ぎになるのは不味いような気がした
んで、取りあえずこの子にここが何処なのかだけでも教えて貰おう
と思っただけど・・・

スースー

・・・起きてくれない。

あれだけ弄りかえして今更どの口が謙虚を訴えるか、と此処に友人が居たら罵られそうだけど、そこはほら。

それはそれ、これはこれってやつで。

曖昧な言葉を巧みに使う日本人って素敵よね。

で、相変わらず愛くるしく寝息を立てているベッドの小さな住人は、一度眠ってしまうと朝まで起きない性質なのか、何度耳元で呼んでも揺すっても無反応。

さてさて、どうしたものか。

規則正しく上下するお腹。

勿論フニフニチェック済みだ。

因みに、この波打つシーツの下に身に纏っているのは濃紺のシツクなパジャマだということも既にリサーチしてある。

手触りからしてこれもシルクだろう。

無地でいて、成人のものと遜色のないそれがちよっぴり大人っぽく演出していて、それはそれで可愛い。

可愛いが、子供のフレッシュユな元気を追求するのなら、ここは年相応にキャラクターで攻めてみるのもいいんじゃないだろうか？

電気ネズミや子供たちに大人気レンジャー系。

はたまた宇宙コアラ系なんかも似合うだろうが、いや、待てよ。着ぐるみも捨てがたい。

まるで小動物と一体化したかのように見えるそれはまさに神憑り。プリティー路線で言うならばウサギは外せないし、ちよっとワールドにオオカミっていうのも断然あり。

しかしこの子の髪色を見ると・・・

黒猫キターー！！

月明かりに照らされた艶々の黒い髪がまるで上等な毛並を持つ猫のようぞ、

結論。

くっ・・・！！

なんでも似合っじゃないの！！

爆走する妄想に思わず口に手を当てて悶えてしまっが、うん。

取りあえず自分落ち付け。

パジャマ談義で盛り上がってる場合じゃない。

今はどうしたらこの子は起きてくれるのかが最重要問題で、いい加減全てのことを諦めてしまいそうだよ。

ふと穏やかな寝息を立てる子供を見ていたら、昔読んだお伽話が頭を過った。

“眠り姫は王子様のキスで目を覚ます”

そう言えば眠っていたお姫様達は手当たり次第王子様にちゅーされてたなー。

リンゴを食べたお姫様然り、茨の中で眠ってたお姫様然り。

言葉は悪いけどこの理論は強ち間違つて無いような気がする。いや、間違っていない。むしろ正解。(断定)

少々吹っ飛んだ傾向のある私の脳は、試してみる価値あるんじゃないか？と勝手に結論付けて、相手は子供だしまあいつかーって面白半分で眠ってるルーにキスをした。

この時ルーの場合はお姫様じゃなくて正確には王様だったんだけどね。

取りあえずピッチピチの据え膳にいただきますをして、小さな影にそつと被さる。

悪戯心に火がついて舌まで入れたのはご愛嬌ってやつだ。

重ねた唇はビツクリするぐらい柔らかくて、クチュ、クチュツと水音を立てながら不埒に動く物体に気が付いたのか、ルーは寝起きとは思えない素早さでバツと飛び退いた。

「だれ？」

その時のルーのと言ったらもう可愛かったのなんの。

警戒丸出しの子猫みたいにプルプルしちゃって、思い出しただけでもご飯7杯はイけるわね。

ベッドの上で体制を整えるルーの顔は、逆光でよく見えないはずなのに何故か蜂蜜色の目だけはキラキラしてて、そこで私は今まで

抱えてきた違和感に気が付いた。

なんだ、そういうことか。

私が欲しかったのはこの子なんだ。

理屈もなにもない。

ただこの子を探してたんだ。

そう思うと、今まで欠けていたパズルのピースがすんと填まる音がした。

やっと見つけた私の【 】

私だけの【 】

予兆も何もなく、突然“満たされた”と理解してしまった不思議な感覚。

言葉に出来ないこの感情を一体どう表現すれば良いのだろう。

ずっと探していた、その探し物の名前さえも分からなかった不確定なものが見つかった、その安心感に身体力が抜けた。

「……どうしたの？どこか痛いところあるの？」

「え？」

さっきまで警戒バリバリだった子供がそつと手を伸ばし、不安気に私の頬を撫でている。

え、痛い・・・つて、うお！

ちよつと待て！

私泣いてる？！

そう言われてみたらさっきから視界はグニャグニャに歪んでるし、首筋が妙に冷たい。

教えて貰うまで全く気がつかなかったよ。

慌てて指で擦ってみるが、涙腺が壊れたかのように一向に止まる心配がない。

ふひー

27にもなつて意味もなく号泣とか恥ずかし過ぎる。

しかもこんな小さな子の前で！

「だめ、腫れちゃう」

乱暴に擦る手を止められるが、目が腫れるとか知ったこつちやない。

今までの冷静さはどこ行った？！と叫びたくなるぐらい、訳も分からず次から次へと零れてくるし、感情も乱れる。

アラサー不覚なり・・・！

日頃のストレスが集ったか？

こんな時に情緒不安定にならなくても良いと思う。

なるなら、この部屋で目が覚めた時になってくれよ。

知らない場所で目覚めて、何も分からず泣き叫んだり半狂乱になってパニックになったりしてた方が、ヒロインとしては価値があるだろ！

それならまだ自分は若いから仕方ないと納得できたのに！

次々と理不尽な思いも溢れ、訳の分からない感情に踊らされる自分が少々情けなくなってきた。

ポンポン

「へ？」

自己嫌悪に突入しかけたところで、ふいに頭を撫でる温かな感触に気が付き顔を上げると、そこに見えるのは一面に移る愛らしい顔立ち。

暗闇の中でもはっきりと分かる金色のお目目が段々近づいてきて、

ちゅっ

……あれ？

目の端に触れた柔らかな感触。

もしかしてちゅーされた？

ピクツと固まってる間に、瞬きと一緒に溢れた涙も唇で拭って反対側にも同じようにキス一つ。

頬に伝っていた涙は舌で綺麗に絡めとられた。

「良かった。涙、止まったね」

「あり、が、とう・・・」

で、いいのか？

あまりの事にビックリして涙は止まったけど、お姉さん心臓も止まりかけましたよ。

パニックになっていた頭はそれを上回る衝撃で機能は一時停止。最近の子ってませてるのね。

こんなこと、未だかつて過去に付き合ってきた彼氏にもやってもらったことないよ。

お蔭で暢気にそんな事を考える余裕さえ出てきたわ。

それから幾分か落ち着きを取り戻し、改めてお互いに自己紹介をしてベッドの上で色々話した。

ルーは年齢の割にはしっかりした子供で聞けば何でも教えてくれた。

此処は何処なのか。

何故私がルーのベッドに潜り込んでいたのか。

この世界の成り立ちを聞いて、自分が異世界トリップを果たしたと知った時に一番にパソコンの心配をしたのは当然だと思う。

絶対にデータフォルダー見るなよ！

呪われるからな！

そして、てつきり女の子だと思っていたルーが実は男の子だと分かったのもこの時だ。

いや、だってこんなに可愛い子見たことないもの！

甘えてきたルーを膝の上に乗せてぎゅーと抱きしめてたら、太腿に当たる柔らかい感触。

なんだこれ？と手を伸ばしてくにくにくに。

「やあっ、ダメっ・・・ナッツ！」

ウルウルと涙目になって真っ赤に顔を染めるルー。

・・・ま、まさか・・・

ぎゅ

「やあんっ」

「ぶはっ！」

もっその戦慄と言ったら。

手の中に感じるこれはやはりアレですか？！

第二の意思を持つと呼ばれるアレなんですか？！

なんてこと！大きくなったらイケメンになるしかないじゃないの！

あつという間に私の脳内では逆・紫の上作戦なる展開が芽吹き、その出来具合にうつとり頬を緩めるが、そこでハッと我に返る。

何という事だ。

こんな幼気な少年を毒牙にかけようだなんて、じゅるり……って、違う違う。

きつと第三者が見ていたら速攻で警察に通報されたであろう、だらしない口元を慌てて引き締める。

幸いルーは私の膝の上で小さく丸まって身体を震わせ、こっちは気が付かなかったようだ。

良かったー

こんな可愛い子にドン引きされたら私生きていけない。

まさか自分にシヨタコンの気があるだなんて驚きよね。

いや、自分でも「もしかして？」と感ずることはあったけど、そこまで重度ではないはず。

ただ、好奇心旺盛にクルクル動く大きな瞳や血色の良い真っ赤に熟れた小さな唇がぷりちーだなーとか、薄い身体から伸びるしなやかな肢体はまるでバンビさんね、だとか、無駄な脂肪は勿論ゴテゴテした筋肉さえも一切ついてなくて、それでいて肌理細やかで弾力のある肌は化粧水も何もつけていないのに、もっちりとしてしつとり。

出来ることなら一日中舐め回し、ゲフン。愛でていたいなーって

切実に願う程度だし。

まあセーフよね、心のお家ではいつもラブラブイチャイチャしてたけど。

フフフーン と今にも鼻歌を歌いだしてしまいそうなほど上機嫌に、蹲ったままのルーを抱き上げる。

道理で同じ年代の飢えた獣が集まる三次元コンパや婚活パーティーに食指が働かない訳よね。

可愛いは正義！

・・・そう言えば今までの歴代彼氏、s皆年下だったっけな？

思わず遠い目になるのは致し方ない。

あの頃は色々無茶やってたな！。うん、色々・・・

ま、まあこの辺りはあまりいい思い出がないので割愛するとして、ルーと出会ってからはもうこの子しか目に入らない。

一目惚れって存在するのね！

しかし、現実問題これからどうしようかな。

愛らしい手をフニフニしながら、これからのことを考える。

ルーの話だとある程度生活水準の高い世界だという事が分かった。ただファンタジーには付き物の魔力が主流ってことは、今までそんなものとは無縁な世界で暮らしてきた私には少々生きにくい世界かもしれない。

取りあえず街で住み込みの仕事探してみよっかなと考えていると、

「ナツ、行くところないんでしょ？」

「ないね〜」

「知ってる人も居ないよね？」

「居ないね〜」

「じゃあさ、一緒にここで暮らそ？」

「え、いいの？」

「勿論！」

いとも簡単に住む場所が確保出来てしまいました。

多少のサバイバルは覚悟していただけに、ルーから持ち出されたこの提案はなんともありがたいもので、今までの常識が通用しない土地で一人で生きていけると言う程私は自惚れてはいない。

生きていく為にはまずは知識が必要だ。

自立が出来るまで、私はルーの家で・・・というか城でお世話になることにした。

この部屋の雰囲気からして貴族か何かかなと思っていたら、なんとそれをもう何段も上回る王族。

しかもルーが国王だというから吃驚だ。

これは平伏した方が良いのかと思い、抱え込んでいたルーを下してベッドからいそいそと離れ、モフモフラグの上で私を知る最上級の謝罪と恭順の意を込め、手を揃え床に付き頭を低くして　云わば土下座と呼ばれる姿勢を華麗に披露した。

「国王陛下とは存じず、不躰な態度平にご容赦くださいませ。先ほどのこの世界に落とされた無知の身故、どうか温かき陛下の御恩情、フギヤツ！」

土下座に華麗も何もあつたもんじやないかもしれないが、突然頭に訪れた衝撃に息を詰まらす。

なんだ?! 敵襲か?!

寧ろこれがこの国での挨拶なのか?!

王様を前に失礼かとは思ったが、頭に被さる重みといくら柔らかいラグの上とは言え額に感じる硬質な床に挟まれて私の貧弱な首が悲鳴を上げている。

グギギと、腕を使いなんとか顔を持ち上げると温かなもので視界は埋め尽くされていた。

息、苦しい。

ぎゅーぎゅー締め付けてくるそれを引き剥がすと、大型の猫……じゃなかった。大きな瞳いっぱい涙を溜めたルーがいた。

「なんでそんな事言うの? 僕のこと嫌いになつたの?」

「いや、だってあのですね陛下、」

「陛下じゃない!」

……いや、王様なんだから陛下だろう、と漏れそうになる言葉をグツと堪え、

「・・・あのですね、ルー？王様に」

「ヤダ！！」

まだ何にも言っただけ

ナツはそんな事しないで！ってルーはイヤイヤと頭を振り聞く耳を持ってくれない。

でも私平民だよ！。しかもこの世界じゃあ戸籍すらない。

「僕がナツのこと守ってあげるっ！誰にも傷つけさせない！だから・・・だから、ずっと側に居て・・・？」

金色の目を細めて、継るように私の身体に腕を伸ばすルー！。

ああ、可愛い・・・！！

もうパツクリ食べてしまいたいぐらい可愛い！！

が、これから此処で生きていくにはある程度節度を持って接した方が良さそうだろ。

そっとな腕を振り外・・・

.....

.....

.....

・・・せる訳がないだろ！このバカヤロウ！

この小さな身体を振り払える程私は悟りは啓いてないのだ。

寧ろ啓く予定は全くない。

欲望のままギョツと抱きしめ頬を寄せる。

「私を守ってね、ルー」

ありがとう。これからよろしくお願いします。

それに答えうように背中に回された小さな手に力が入るのが分かった。

花嫁ですけど何か？3

取りあえず今日はもう遅いから休もうと言う話になり、その日は二人で手を繋いで眠った。

なんだか初恋でもした少女のように胸が高鳴って、ずっとドキドキした。

・・・決して目の前のキューティクルな少年の寝顔に興奮して血圧が上がったとか、そういうんじゃないから。多分。

そして、朝。

目覚める頃には既に話を通っていたのか、誰にも邪見されることなく皆客人として扱ってくれた。

寧ろうつとりと切望した目で見られ平伏された。何故？

後で聞いた話によると、この世界では黒髪や黒い瞳ってとても珍しいのだとか。

ほほ、何の取り柄もない私でも日本人デフォでちょっとした珍獣気分を味わえるのね。

けれど畏まった態度で接せられるのはとても苦手なので、普通に接して貰うようお願いして、なんとか呼び名は「ナツキ様」で定着した。

本当は様付けも嫌だったんだけど、これ以上は譲れませんって断固拒否されちゃって・・・

ってか、譲ってくれたの出会い頭での平伏だけじゃん！！

オカシイでしょ？！

人の顔見るなり、皆一斉に体制を低くして足を折るんだよ？！
そんなに私の顔が見たくないのかと思う程、誰も顔を合わせてくれない。

それが寂しくなつてルーに相談したら「仕方ないよ」って苦笑された。

・・・ルーもこんな気持ちだったんだろうか？

しかし、私は偉くもないただの一般人だ。

お城で働く人は大概、貴族出身が多いと昔聞いたことがある。

ならば何の地位も持たない私はこのお城で一番低い身分にあたるのに、そんな私に皆が拳つて頭を下げるのは変だと切々と訴え、ルーの口添えもあつてか始めの頃に比べると大分砕けて接してくれるようになった。

様付けだけど。

もうちょっと気軽にしても罰は当たらないと思うんだけどな。

一部のお偉いさん連中なんて、半裸で抱き着いたり、自分の性癖暴露したり、寝室に忍び込んでたりしてるし、そこまでとは言わないけど、もう少しお城に仕えてる人達とフレンドリーな関係を築きたいと言うのが本音だったりする訳で。

でも出生不明、それこそ言葉の通り双黒の珍獣が突然降つて湧いて出てきたんだから、距離を置かれるのも仕方ないわよね。

何だかんだ言いながらも、ここでの生活は自分なりにとても楽しんでると思う。

少し壁を感じるも、皆親切だし幸いな事に言葉の壁や文字の読み書きの壁にぶち当たる事がなかったので、魔力について勉強したり、ルーにセクハラしたり、元の世界に帰る方法を探したり、ルーにセクハラしたり、お城探検と言う名のルーの衣裳部屋に籠つて残り香をハスハスしたり、ルーにセクハラしたりと、日々とても充実し

ていた。

そしてある日のお茶会でのこと。

突然ルーが部屋に飛び込んできたかと思うと、

「ナツとずっと一緒にいたい。僕のお嫁さんになってくれる？」

「はい」

ドガッ！

バダッ！

ガシャーン！！

この時の破壊力と言ったら凄まじく、その時部屋にいたメンバーは凍りつき、典型的な効果音と共に数秒後には部屋は見るも無残なぐらい崩壊した。

それはもう見事にここだけ大型のサイクロンにでも襲われたのかってぐらい荒れに荒れた。

って、思わず条件反射で頷いちゃったけど、お嫁さん？

「うん、僕と結婚してください」

いつもとなんら変わりのないあどけない笑顔。

しかし嘘や冗談といった類が全く見てとれない真剣な眼差しに胸

がキユンキユンする。

大人っぽいルーも良くってよ……！

ちよつとクール系に育ったルーを想像して、うっかりとそのまま妄想の世界に旅立ってしまいそうになっただが、なんとか理性で引き戻して呼吸を整える。

結婚、か……

確かにもう27だし、そろそろ結婚を本気で考えなければいけない時期だが、あまりにもルーと私では年が離れすぎているんではなかろうか？

いや、決してルーが嫌いとかそんなことはない。

ってか結婚するならその相手はルー以外には考えれない。ルー本命一直線。

でも、それはただ私個人の感情で、世間的に考えればどうよ？

財産目当てで幼い王に近づいた悪い大人？

思うがまま裏から王を操り権力を振りかざす悪女？

出生も分からない低俗な売女と言うレッテルを張られて、生涯陰口を叩かれる生活を思い浮かべてみる。

・・・ルー相手ならそれはそれで良いかもしれない。

寧ろ売女って言われるんなら、堂々と公共の場でもあんなことやそんなこと、終いにはアーーツ！な事も出来るんじゃない？

国公認カップル？

なにそれ、オイシイ！やっふーい！！！！

しかしこの国にも未成年保護法なんぞがあつて監獄に入れられてしまえば、私のバラ色人生も終わってしまう。

ルーに触れない生活だなんて耐えられないわ・・・！

「因みにこの世界で結婚つて幾つから出来るの？」

近くに居たゼノンに尋ねると、

「特に規制はございませんが、大人と見なされるのは250歳からですね」

「そう、250さ・・・え?!250歳?!」

「おや？御存知りませんでしたか？」

てつきり陛下から聞いていたと思ったのですが、とゼノンはルーの方へ眼を向ける。

なんと！

振り返るとルーには珍しく、忘れてたって顔をしていた。

やんっ可愛い！！

ゼノン曰く、この世界の寿命は魔力の有無によって長さが決まらしく、平均して大体1500歳前後だそうだ。

個人差はあるものの、250歳前後で子供から大人へと身体が成長し一番魔力が高い時期で身体の成長は停止。

寿命が尽きる頃になだらかにまた老いていくのだとか。

だから綺麗な人が多いのか。

そして見た目が5歳児のルーは先日792歳迎え、

「・・・大人？」

「ううん、王様は魔力がいっぱいあるからまだ身体は成長途中なんだって」

どつりでしたっけかりした子供だと思った。生まれてから700年経ってまだ成長途中とは・・・異世界恐るべし。

しかし誕生日に一緒に居れなかったことが大変悔やまれるが、「これからはずっと一緒に祝いしてね」とはにかなだ笑顔が見れたことで良しとする。

ああ、うちの子が一番可愛い！！

だけど、その話でいくと心配事が一つ。

「魔力で寿命が決まるんなら、私すぐに死んじゃうわよ?」

だって私魔力なんてもの持ってないもの。

このまま50年も経てば確実に私は皺くちやおばあちゃんになる。

腰も曲がって今は黒く艶やかな髪も徐々に混じりっ気を増し、やがては真っ白な髪になるだろう。

けれどルーは多少成長はするかもしれないが、ほぼ姿は変わらず子供のまま。

幾ら夫婦とは言え、周りから見れば甘える曾孫に曾祖母の図。

・・・なんか、嫌だな。

今以上に自分から甘えにいけないじゃないか。

しかしゼノンは問題ないという。

なんで?

「王との婚姻は特別でして、召し上げられた花嫁は王の持つ魔力と同調致します。ですからナツキ様の場合はルーファウス様ですね。ルーファウス様と同調・・・云わば同じ時を生きるようになるのです」

なんですと!!

それはずっとルーと一緒に居られるってことですか?!

「死別はまず・・・在り得ないんじゃないかと」

毒花のような艶やかな笑みを浮かべるゼノンに少し嫌な感じがしたが、今はそれどころではない。

ビバ、異世界・・・！

思っていた以上に年齢差はあったけど、ルーの方が年的には上だからこの際肉体的なものは置いとくとして、このまあルーに甘えて結婚しても良いのかと考える。

本当はどこかで思ってたんだ。

こんなことはオカシイ、子供にすることじゃないって。

身体に染みついた“常識”が駄目だと叫ぶのに、感情が先足って止まらなくて、一度触れたらもっとももっとって溢れちゃって。

理性では追いつけないぐらいずっとルーに飢えてる。

それをルーに告げると「全然オカシくないよ。僕嬉しいよ」って、言ってくれて年甲斐もなく大泣きしてしまった。

「ふ、不束者ですが、つよろじくお願い、じまずっ・・・！」

「こちらこそ。愛してるよナツキ」

この日はいつも以上にキスを交わした。

で、そこからは怒涛の準備が始まって、あれよあれよと結婚式当日。

真っ黒な軍服みたいな正装をしたルーの横に立つ同じく真っ黒のドレスを着た私。

どうやらこの世界では黒が縁起が良いとされてるみたいで、

「白いドレス着せてあげられなくてごめんね？」

申し訳なさそうに謝るルーにときめいたのは言うまでもなく。

「ドレスが着たいから結婚するんじゃないもの。私はルーとずっと一緒に居たいから結婚するのよ」

ぎゅっつと小さな旦那様を抱きしめる。

「……ありがとう」

薄暗い教会のような場所で、大勢に見守られながら静粛の雰囲気の中で恙なく式は進行し、途中指輪交換ならぬ、鮮血交換なるものがあったそこでまた一騒動があったのは御愛嬌。

極度の緊張と使い慣れていないナイフの所為か、盛大に指を切っ
てしまいあつと言う間に私の左手は血みどろスプラッタ。

式を進行していた厳格そうなおじいさんも一気に顔色を無くして
急いで救護班を呼んでくれた。

一同騒然となる中、裏で控えていた救護班の人も慌てての駆けつ
けてくれて応急処置してくれたものの、（なんか私がやらかしそう
だったから、予めゼノンが待機させていたんだって）くそう、どん
だけ気合入れてんのよ私。

ゼノンに読まれていたことは悔しいが、真っ赤に染まる手に興奮
してしまった私を宥めながらルーに乙女の夢の一つ、指ペロをして
貰い危うく昇天しかけた。

我が人生悔いはなし・・・！

こうして出会って2週間。私は稀に見るスピード婚を果たしたの
だ。

今思い返しても中々ゴシック系の結婚式だったなあと思う。

全体的に黒かったし、所々で魔法陣みたいな絵柄も見だし。

まあ魔力があるんだから魔法も存在するわよね。

なんか皆角ついたり羽生やしたりコスプレして楽しそうだったな
あ。

今度私もコスプレしたい！

で、だ。

結婚式と言う人生二大イベントの中の一つを終えて、一段落。特に結婚したからと言って私とルーとの間では何も変わることはなかった。

だって、結婚する前から執務以外は大抵一緒に居たし、普通にちゅーもしてたし、お風呂にも入ってたし、同じベッドでも眠ってたもんねー。

そして、結婚したからと言ってルーに対して落ち着きを取り戻したかと言うと、全くそんなことはなくて。

いや、寧ろ悪化を辿る一方？

なんだろうね？

何がいけないんだろう。

“夫婦”って言葉に変に安心感を覚えたのか、今まで理性でなんとか踏み止まっていた部分も全て枷が緩んでしまったように、ルーを目の前にするといとも簡単に決壊・崩落・崩壊。破滅への道まっしぐら。

朝も昼も夜も関係ない。

暴走具合も今まで以上にエスカレートして、発情期の猫にも負けぬ甘えっぷり。

見た目5歳児にいやーにいやー纏わりつく27歳児。

・・・常識で考えるとあまり絵的には許される光景じゃないが、これが新婚ってやつなのだ。

自分の旦那様に甘えて何が悪い。

そう開き直ってしまえば全てが桃色ハネムーン。

しかし時に不安に思うのが乙女心ってもので。

ルーもルーで何だかんだ言いながらも最終的には受け止めてくれるから、嫌われてはないとは思、う。

思いたい。

流石にトイレに一緒に入ろうとしたら怒られたけど。(メツてされた!メツて!きゅん!!)

依存しているとは理解しているんだけど、こんなにも誰かが欲しいと思ったことは初めてで、自分でもどうしたら良いのか分からない。

冗談抜きでルーに拒絶されたら死んでしまうんじゃないだろうか。

「メアリー!」

「なんででしょう」

「私、ルーに嫌われてないわよね?!」

「この上なくご寵愛されていると存じますが?」

紺色の髪を揺らしながら私専属の侍女、メアリーは「何言ってるだ?コイツ」的な視線を向ける。

こっちの世界に来た時から側にいてくれる、メアリー・リー。

見た目は16、7歳ぐらい(実年齢478歳)の小柄な御嬢さんで、ふっくらとしたアーモンドのような猫目の赤い瞳にスツと鼻筋の通った形の良い鼻、そして淡く色づいた小さな唇。

その配置は抜群で、まるでどこかのお姫様みただけで少々残念

なことに表情は鉄壁の“無”

精密に出来たビスクドールの如く、滅多にその変化は拝めない。

その上、言葉に含まれる毒が過激で、度々その毒を浴びている私としては、もうちょっと手加減して欲しくもあるんだが、

「貴女が毒如きでやられる器ですか」

とにつこり最上級の笑顔向けられ、

きゅん！

ルーと違った意味で、その笑顔に撃ち抜かれた。

・・・なんか遠まわしに鈍感だと告げられたような気がするけど、きつとそれは気のせいだよね。

初めて見たメアリーの笑顔が嬉しくって、その日の夜ルーに話すと「随分気に入られてるね」とルーも真ん丸の金目を細めて笑っていた。

ルーによるとメアリーは気に入った人物以外には絶対に従わないのだとか。

「ん？でもルーが側に居るようお願いしてくれたんじゃないの？」

「始めはそうだけど、僕がお願いしたのはあの日だけだよ。ナツ付きの侍女選抜するのに時間が掛かるからそれまでの間一緒に居てあげてって。そうしたらその翌日に彼女自身が自分の意思でナツ付きの侍女になるよう申請してきたんだ」

今までこんなことなかったから驚いちゃったと面白そうに話すル

！。

なんと！

私意外と気に入られてたんですね！

まさかこれが噂に聞くツンデレってやつですか。

ツンデレってやつなんですね。

気高く澄ました小さな顔に、髪よりももう一段落ち着いた深い青色の侍女服を纏いながらも気品良く歩く姿はどこか猫科の獣のようで。

普段はクール一徹。

けれどふとした瞬間、不意に頬を染め擦り寄ってくるメアリーを思い浮かべると、自然と結ばれた拳に力が入った。

ツンデレイイ・・・！

今まで身近にツンデレ属性が居なかったから分からなかったけど、世間で騒がれるのが漸く理解できた。

「・・・脳内で不埒な考えをするのはお止め下さい。私が汚れます」

「！汚れない！まだ汚してないから！」

さつき以上に冷たい視線を向けられ、慌ててトリップしていた思考を呼び戻し、不自然な咳払いでごまかす。

ツンデレも好きだが、やっぱり今一番の問題は愛しの旦那様だ。

「ゲフン。で、さっきの話に戻るんだけどね・・・」

チラリとメアリーに目を向けると「早く言え」と無言で促される。
あつっ！今日もツン全開ね・・・それは置いといて。

「やっぱり、ね？なんと言うか、その・・・少しやりすぎかなーとか、本当は嫌なんじゃないかなーなどか思うのよ。ほらっルーってはまだ子供だし、色々無理させてるんじゃないかなっって、ね？はい・・・」

「後悔してらしゃるんですか？陛下と御結婚されたこと」

「後悔はしてない！..!」

即答する私。

あんなに優しくって思いやりのあって可愛い旦那様の何に後悔しろというのだ。

幸せを噛み締めることはあっても悔いることなどあるはずもない。

「だったらもっと御自身に自信をお持ち下さいませ。陛下の唯一の妃様しよう？」

「・・・はい」

頂垂れながら返事をする私に、メアリーは大きな溜息を吐く。

「そんなに心配ならもう少し慎みを持たれては如何ですか？今日も朝から陛下の下半身に齧り付いていたようですが？」

「うっ！」

やはり侍女様はなんでもお見通しか。

今朝方、ルーより先に目が覚めた私は胸の中で眠る小さな旦那様を見つけないまま堪能していた。

相変わらず眠る姿も愛くるしい。

因みに本日のパジャマは水色に羊さん柄だったりする。

勿論私のリクエストだ。

こちらの世界には羊が居ないのか、ふわふわもこもこ安眠の代名詞の動物と、中々言葉では伝わらなかったので直接紙に書き、私がデザインして服飾関係の人に作ってもらった。

白い羊がイイ仕事してます。

幼児と羊、ナイス組み合わせ。

癒されるわ〜

主に私が。

しばらくその姿にハアハアして、起こさないようそのままそーっと身体を下にずらし、今度は私がルーに抱きつくような形でその薄い身体に腕を回して、小さな膨らみのある場所に顔を埋めてそのま

ま二度寝に持ち込んだのだが、どうやらバツチリ見られたらしい。

「だってルーの顔を見たら我慢できなかつたんだもの！なんなの？
！あの安心しきつた寝顔！すびすび寝息立てて胸の間にいるのよ？
！そんなの食べてつて言ってるようなものでしょ！」

「安心、ですか・・・」

「ああ！ルー末恐ろしい子！私を一体どうしたいの・・・?!」

「・・・・・・・・」

「ハッ！まさかこれが噂にきく焦らしプレイってやつ?! どうしよう！私まだそこには手を出していなかったわ！こんなことなら、ギヤルゲーもやり込んでおけば良かった！」

「（無視）ナツキ様、本日のティータイムのお茶請けは木苺のスコーンで宜しいでしょうか？」

「いつその事虜辱ゲーももつとやつとくべきだったわ。夫婦の営みには色々パターンあるもんね。寧ろ私がルーに対してやりたいんだけど、どうしたら良いと思う?」

「（無視）あと、カルディア様が午後からいらっしやるようです」

「あんつメアリー冷たい！でもそんな貴女も好き！」

「（無視）ああ、紅茶が冷めたようですね。新しい物とお取替え致します」

「・・・・・・・・」

今日のメアリはやっぱりツン、か・・・
ってかメアリがデレてるどこまだ見たことないな！

ふと窓の外に目を向けると、木々の木漏れ日の間を二羽の鳥が連れ添うようにして飛び立つのが見えた。

日本で慣れ親しんだ景色と似ても似つかないこの世界で、初めは確かに不安もあって生きていけるのか心配だったけど、ツンデレな侍女に小姑みたいに女顔の変態宰相、親切にしてくれるお城の人たち、それに　愛しの旦那様と出会えて、この世界に来て本当に良かったと思う。

失った物は多いけれど、それ以上に得た物も多い。

私、後悔はしてないわ。

それはルーに出会ってから、何度も言ってきた言葉。
その言葉に嘘偽りなどは全くない。

どんなに見上げてても、この空は日本の空とは繋がっていない。
恋しいと思っても、あの世界の土を踏みしめる事はもうないだろう。

二度と会うことは叶わないけど、ずっと心配してくれていた両親や先輩達に言いたい。

今までありがとう。

「これからは別々の道を歩むことになるけれど、私は今幸せですって。」

「・・・ねえメアリー？私に男性性器ついてたら確実に犯罪者になつていたと思わない？」

「今でも十分犯罪者です」

さーて、旦那様が帰って来るまで今日は何をしようか。

カルヴァルドは今日も良い天気です。

旦那様の憂鬱（前書き）

少し長いです。

ルー視点

旦那様の憂鬱

満月の夜

僕は僕だけの月を手に入れた。

「相変わらず彼の姫君は愛らしいですね」

執務室に入るなり、クスクスとゼノンは笑う。
もう恒例となりつつある朝のやり取りのことだろう。

「そう思うならもう少し時間ずらして来てよ。気が利かない」

「おや？そんな事をして本当に宜しいので？害された時のナツキ様の顔、好きかと思ってきましたが」

「まあ、ね。膨れたナツも可愛い」

全身で欲求不満を訴えるナツの姿を思い出し、自然と口元が緩む。普段から「私は大人だ！」と豪語している割には、直ぐにぷっくりと頬を膨らませて唇を突き出す仕草をする彼女はとても可愛くて人間の感覚から言うと、27歳と言えばもう立派に成熟した大人と見なされるんだろうけど、ナツはどう見ても15、6にしかみえなかった。

「ははは、皆揃って私を子供扱いしていいいさ。その内絶対にギャフンと言わせてやるんだからな・・・！」

グツと拳を作り高らかに宣言をするナツ。

そう言う姿も幼く見える要因だと思っけど、可愛いから黙ってる。

「本当に・・・ナツキ様は夢の中でも無邪気でらっしゃる」

ピク

「・・・覗いたの？」

「ええ、不埒な輩が近づいておりましたので」

書類にサインをしていた手を止め見上げれば、ゼノンは淫魔特有の顔を楽しそうに歪め、掌の上に半透明の球を作った。中を覗けば人間の男の頭が一つ。首から切断されたそれは引つ切り無しに喘ぎ声を上げている。

「趣味が悪い」

「そうですか？中々可愛いですよ彼」

そう言つて球を撫でる姿は、男でも女でも惑わせることが出来る極上の毒華そのもの。

ゼノンは宰相でもありながらも四方を治める公爵家の一人でもあり淫魔族を総括する統領だ。

位が高くなるにつれてその容姿が整ってくるのはどの種族においても同じだけど、中でも淫魔は特に優れた者が多かった。

淫魔は精を好む。

男でも女でも気に入った者を犯し奪うため、惑わせ餌を惹きつけられるよう自然と美しくなるのは理に適っていたし、彼等自身の性別もあつて無いようなもの。

そして夢は淫魔の力を存分に発揮できる領域だ。

「力量からして東のアーディシユの者ですね。あの国はそこその魔術師を輩出していますから」

「ふん。鼻だけは良いみたいだね」

夢から接触を図ったか。
お行儀が悪いなあ。人の物に手を出すなんて。

「それで？その術師達どうしたの？」

ニイっと歪められる紅い唇。

「最高の悪夢の御持て成しを」

「そつ。ならいい」

きつとゼノンの事だ。

御目がねに適わなかった残りは淫獣にでも食べさせているのだろ
う。

それが奴等にとって良かったのかどうかは知らないけど。

ナツと出会ったのは先の満月の夜だった。

不覚にもその気配に全く気付かず、突如流れ込んできた甘い力
に目を覚ますと、暗闇に紛れるように女が僕を見下ろしていた。

またか・・・

今までにもこう言うことは良くあった。

僕に正妃や側室が居ない事を理由に、裏から実権を握ろうとした元老院のジジ共が自分の息の掛った女を送り込んできたり、逆に暗殺を企ててその手の者を招き入れたり。

しかしこの国で絶対の力を誇る僕に無断で触れるなんて自殺も良いところ。

ここ最近は寢所を汚すことは少なくなってきたのに、面倒くさい。

そう思っていたのにその女は一向に消滅する気配はなかった。

何故？

奇妙な感覚に囚われ、サツとその場から離れる。

それと同時に月に掛かっていた雲が晴れ、写し出された女姿を見て息を飲んだ。

双、黒・・・？

月明りに照らされて嫋やかに波打つ漆黒の髪に、浮き立つような白い肌。

頬を染め口元を手で隠して伺うように覗きこんでくる潤んだ瞳も僕と違って真っ黒だった。

黒は高貴な証し。

世界に愛される存在。

キレイ

物であれ何であれ、純粹に何かを美しいと思ったのはこれが初めてだった。

止まっていた歯車が動き出す。

見つけた・・・僕が欲しかったのは君だったんだ。

今すぐに食べてしまいたい衝動に駆られるが、グツと堪える。

ダメだ、この子は食べない。

だってこの子は僕の花嫁だ。

僕と同様にナツも思う事があつたのだろう。

いつの間にか音も無く溢れた涙は頬を伝い、幾つもの流れを作っていた。

泣かないで？

君が憂いむような事は全て僕が消し去って上げるから。

瞳から零れる甘い甘い雫を舌で拭う。

「あり、が、とう・・・」

戸惑いながらも笑顔を向けてくれた君はなんとも可憐で。

ただ死ぬ為に生きてきた日々に光が差し込まれた瞬間だった。

言葉を交わしている内に、どうやら彼女は此処とは違う世界から来たと言うことが分かった。

自分の部屋で眠っていたはずなのに、目が覚めたら僕の隣りに居たのだとか。

なんだ、夜這いじゃなかったのか。

ナツにだったら殺されても良かったのに。

少し残念に思いながらも、取りあえずナツに尋ねられた事には全て答えて、この世界について説明した。

世界に広がる国やそこに住む住人たちの事、それに魔力の事も。

そしてもう“帰させない”ことを告げると、

「うわぁーパソコンの中18禁BLゲーム入れっぱなしだよ！どうする？！いや、どうもできないけど！ってか、デスクトップの背景幕末の乙ゲーヒーロー達の半裸のままだし！OL失踪とかニュースで騒がれて押収品としてパソコン持ってかれて世間様が見たらどう思われるか・・・！あばばばば」

って呻いてた。

知らない単語がいっぱい。

びーえるゲームってなんだろう。

聞いたら教えてくれるかな？

あと驚いた事にナツは人間だった。

この世界で“黒”を持つ人間など存在しない。

いや、人間だけではない。エルフ族や獣人族、精霊族を探してもまず“有り得ない”のだ。

魔族にだけ許された色。

例え魔族と他種族が交じろうとも現れはしない、純潔の魔の証し。ナツが人間だと知られるとアイツ等は黙ってないんだろうなあ。

そうなる前にも早く僕のものにしくっちゃ。

隣りで眠るナツにそっと口付けを落とす。

ふふふ、さつきとは逆だね。

泣き疲れた所為か、ナツは静かな寝息を立ててぐっすりと眠っている。

僕が王だと知った時の行動には驚いたけど、結果的に彼女はそれを受け止め僕の手を取ってくれた。

この僕に涙を流させるなんて、きつと後にも先にもナツだけだろ
うな。

口元に笑みを浮かべながら公爵達に思念を飛ばす。

“花嫁が来た”

それだけ伝えれば、あとは彼等が手配するだろう。

あ、人間だつて言うことも伝えておかないと。

この国に居る人間は極僅かだ。それ以外は皆魔族と呼ばれる者達
ばかり。獣の姿を持ち人から忌み嫌われ恐れられる存在。

・・・ナツも怖がるのかな。

もしもナツが怖がるようならこの国の住人を消してしまおうか。

そんなことを考えながら、取りあえず皆に人型を取るように勅令
を出す。

魔物と呼ばれる理性の乏しいモノ達以外なら大丈夫だろう。

微かに揺れる気配があつたけど・・・これはカルディアか。

まあ、そうだよな。

アレは特に人間の女を嫌う傾向がある。種族的なものなのだろう
けど、幾ら公爵家の一人と云えどナツに害を与えるなら容赦はしな
い。

これから忙しくなるな。

ナツと繋いでる方とは逆の手で空中に円を描く様クルクルと回し
結界を張る。

力の制御の仕方も教えないといけないね。

深い眠りについたのか、隣りで眠るナツの身体からは闇 魔力
が流れ出ていた。

ナツ自身は魔力なんてモノは備わってないと思ひ込んでるみたい
だけど、触れ合った唇から流れてきたそれは極上の物だったし、黒
を身に宿わせる者が“力無し”とは考えにくい。

現に溢れているそれを可視すれば、キラキラと小さな輝きを閉じ込めた最高級の黒いビロードのような闇が、金色の僕の魔力を包み込むように、何十倍にも圧縮しこの部屋を満たしている。

起きてる時は無意識の内に多少は制御出来てるみたいだけど、ああ、ほら。

ドアの前で警備してた奴等が破裂した。

明らかに許容オーバー！。

これだけの力を浴びて、まあ持った方かな。

僕としてはなんとも心地が良い空間だけど、並の魔族が触れるとものの数秒で破裂することは必至。

魔力っていうのはそこに意思があるように上から下へと流れる習性がある。

まるで川の流れのように魔力の少ない者達へと与えられ、力を底上げしていく。

強い者の近くに居ると自然と力が増強されるが、でもそれを受け止めれるのは自分の許容分だけで。

皮袋に水を入れるのと同じで自分にあつた容量は受け止められるけど、それ以上は張り裂ける。

今、この部屋に立ち入れる者は一体どれくらい居るのやら。

パンクするか発情するか。二者択一。

過剰な力は催淫効果を促すからね。

幾ら許容範囲内でも一気に流し込まれるとバランスを崩し理性は削られて本能が剥き出しになるから、同等の力持ち同士だと破壊欲に駆られて殺戮・食事を楽しむようになるんだけど、明らかな力量差で一方が魔力が強いとそれに掻き立てられてもう一方が性欲が刺激され発情して、満たされるまでは平静で居られなくなる。

だから淫魔族は性欲・食欲も兼ね備えて魔力が強い者が多いのだ。出生率が著しく低い魔族にとっては魔力が強い者がいるのは喜ばしい事だけど、その対象がナツだとしたら話しは別だ。

僕の次に力が強いとされる公爵達もきつと強制的に興奮発情状態

にされるだろう。

・・・うん、ナツには頑張ってもらおう。

触れさず気は全くないが、彼等の性格を考えると一筋縄ではいかない。

強い者に焦がれるのは魔族の本能だからなあ。

しばらくはこの部屋に誰も近付かぬよう再び思念を飛ばし、瞳を閉じた。

こんなにも穏やかな眠りは初めてかもしれない。

触れ合った場所から感じる優しい温もりと闇に包まれて僕は眠った。

翌朝、ナツが目覚めると部屋に滞っていた力は消えていた。

やっぱりアレは無意識の内の仕業かあ。

一緒に朝食を取り、名残惜しいが一旦ナツとは別れ執務室へと向かう。

これからの事で色々と準備をしなければいけない。

「メアリー」

呼ぶと何も無い空間から、目深にロープを纏った一人の女が現われた。

「暫くナツの側について。護衛が見つかるまでで良い」

「・・・は」

短い返事と共に、その姿は消える。

取りあえず彼女が居ればナツは安全だろう。なんせ彼女も捕食者側だ。

きっとこれから古参のジジ共はナツを利用しようと動き出す。これだけ巨大な力に気がつかないはずがない。

貴重な双黒。

その力に惹かれ、己もあやかろうと群がるだろう。

ある程度の牽制は必要かな。

それに最近人間達の動きもきな臭いしね。

また無意味な戦でも始めるつもりなのか、魔力の流れが淀んでいる。

弱い癖に本当人間は戦う事が好きだよね。

「花に集る蠅共が」

僕の大事な花に触れるなら、その手足剥ぎ取ってあげる。

泥に塗れて転がっていれば良いよ。

それとも潰して養分にしてあげようか？

ナツがこの世界に来て幾日か過ぎた。

すっかりナツはここに馴染んだようで、適応能力が高いのか食事に関しては初めて見る食材ばかりだったみたいだけど特に問題は無い様子でいつも美味しくそうに食べているし、城の者達とも挨拶を交わす程度には仲良くなったみたいだ。

何故か僕の衣装部屋から良く転がって出て来くるのを発見されているようだけど、衣装部屋に何かあるのかな？

あと僕と一緒に居ない時は図書館に行つてナツは何か調べ事をしてることが多かった。

十中八九、元の世界に帰る方法でも調べているのだろう。

“帰せない”って言ったのに、ナツつてば中々諦めが悪いなあ。

“帰れない”んじゃなくて“帰せない”

正確に言えば帰さない、だけど。

やっと見つけた僕の花嫁を、早々手放すことなんてあるはずないでしょ。

本当はもっとこの世界に慣れてから受け入れて貰おうかと思ったんだけど、これは早く婚姻を結んだ方が良いかな。

逃がしてなんてあげないよ。

手早く書類を片付け、この時間ナツが居るであろう部屋を尋ねた。そうしたら何故か部屋にはゼノンと東の公爵シグルドがテーブルを囲んでナツと談笑してて、

もー！また勝手にナツに会いに来てるー。

ナツは僕のだって言うてるのに。

・・・まあ良いや、こいつ等には立会人になって貰おう。

「ナツとずっと一緒にいたい。僕のお嫁さんになってくれる？」

「はい」

「ちよ、陛下！本気でs、グアツ！！」

瞬時に隅に控えていたメアリーが動き、シグを伸した。

うん、早さはやっぱメアリーが一番だ。

ナツの見えない位置から小型のナイフを飛ばし、それを避けた所でメアリーの蹴りが見事に決まった。

シグはちよつとお喋りだから静かにしててね。

ついでにゼノンの方にも同時に攻撃されたみたいだけど、こっちは綺麗に回避してた。

ナツは「何事?!」と慌ててたけど、ニコニコ笑う僕を見てすぐにさっきの言葉を思い出したのか頬を染め、けどちよつと困ったような顔になった。

あれ？きつとナツなら二つ返事で喜んでくれると思ったのにな。

少し考えるような素振りを見せた後、どうやら僕の年齢が気になるらしい。

歳？

この外見がダメなのかな？

まだ完璧な成体には成れないけど、それに近い形はとれるから交わるのには何も心配はないと思うんだけど。

それにもう随分前に成人の儀も終えたし・・・

この国で大人と認められるのが250歳だと知ってナツがビクビクしている。

「おや？御存知りませんでしたか？てつきり陛下から聞いていますと思っただのですが」

・・・あ

ゼノンの言葉にハツとする。

僕としたことがすっかり失念していた。

年齢や寿命のこともそうだけど、彼女は人間だ。

僕達とは色々違う。

ナツはゼノンから話を聞くと恐々と僕の方に振り返り、

「・・・大人？」

「ううん、王様は魔力がいっぱいあるからまだ身体は成長途中なんだから」

その辺りは曖昧に濁しておく。

だってなんだか黙っていた方がオモシロそうなんだもん。

でもまだナツは浮かない顔。

「魔力で寿命が決まるんなら、私すぐに死んじゃうわよ？」

ああ、それを気にしていたのか。

普通ならそうだね。

魔力の強さで寿命が決まるのは“人外”と呼ばれる者達だけだ。

幾ら魔力を保持しようとも短命種の人間と僕達では明らかに寿命は違う。精々生きて100年前後と言ったところだろう。中には300年くらい生きる者も居るが、そんなのは稀だ。

先の見えない僕と先に見えるナツ。
きつと彼女はあつと言う間に年を取り、土に戻る。・・・僕を置いて。

その事を分かってか、心配するナツにゼノンが一粒の種を蒔いた。「王との婚姻は特別でして、召し上げられた花嫁は王の持つ魔力と同調致します。ですからナツキ様の場合はルーファウス様ですね。ルーファウス様と同調・・・云わば同じ時を生きるようになるのです。死別はまず・・・在り得ないんじゃないかと」

「よおっしやあああ!!」

あ、ナツが歓喜に吠えてる。
ホント可愛いよね、そう言うところ。

でもね、手放しに喜んでくれるナツには悪いけど、それは事実であって真実ではないんだ。

嫌気が差す程の長い人生に、王が狂ってしまったようにとあてがわれる花嫁と言う名の生贄。

通例なら同調すると言っても、精々寿命が数百年延びる程度で共に消滅など有り得ない。

・・・ある方法を除いては。

うーん、これはゼノンにばれてるな。

僕はね、ほんの僅かな時間で満足するほど出来てないんだよ。
最後の時まで一緒に居たい。

ナツが嫌がってもずっとこの腕の中で閉じ込めていたい。

だからね、君には内緒でこっそり結んだんだ。

魂の・・・

奴隷の契約を。

もう人間側では禁忌となった禁術の一つ。魔族と人間の間で主従の関係を結ぶことによって、人が魔の力を得る方法だ。

身体を魔に属する者へと変え死さえも物ともしない力を与える。そしてその代償として人は真名を差し出す。真名を奪われると言う事は、命を差し出したのと同じで決して主には逆らえなくなる。

まあナツの場合十分過ぎるぐらいの力があるし、どっちかと言うと元から魔寄りだからこれは必要ないとして、重要なのはこの制約だ。

“ 僕から離れない ”

これが大事。

契約が完了されれば、生きてこの楔から逃れることは出来ない。主が死んで一緒に消滅するか主に殺されるかのどちらかで、自分で死を選ぶ事は許されない。

要は僕が死ぬまでナツキも死なないってこと。

なんて甘美なことなんだろう。

考えただけでもゾクゾクする。

あと、ナツの力も今はこの制約で押さえてある。

未だにナツは自分に魔力が無いと思い込んでいるから、制御しようとすることをしないのだ。

なので近づいた者は片っ端からバンバンバン。

僕は別に構わないと思ってただけど、ナツが「誰も目を合わせ
てくれない」と沈んだ表情をするもんだから、伯爵辺りの者達より
も少し多いぐらいまでに力を制限した。

あまり制御しすぎると逆に捕食されかねないし、かと言って多
すぎると本末転倒。中々難しい。

まあ、見る者が見たら制御されているのは分かるからそう簡単
には手は出されないだろう。

選り強固な契約で僕はナツを愛するよ。^{キスナ}

少し卑怯なやり方だけど、ナツは許してくれるよね。
こっそり左胸に刻んだ刻印を思いほくそ笑む。

ナツが盲目に僕を好きになるのは変じゃないんだよ。

「ふ、不束者ですが、っよろじくお願い、じまずっ……！」

泣きながら縋るナツを宥めながらにっこり微笑む。

「いちらこそ。愛してるよナツキ」

だってこれは……

僕が願ったことなんだから。

そして無事・・・とは言い難かったけど、婚儀を終えてナツは正式に僕の妃になった。

黒いドレスを身に纏ったナツは、まるで世界からの寵愛を一心に受けた宝石のようで。

女は化粧すると変わるって言うけれど、参った・・・
変わり過ぎだよ。

普段どちらかと言うと無邪気で可愛らしいイメージが強いのに、目の回りを黒で囲んで唇に赤いラインを引いたその姿はまさに妖艶そのもの。

胸元の開いたドレスからはしっかりと胸の谷間も見え、透けるような白い肌が淫靡さを醸し出し、柄にも無く言葉を失ってしまった。

「どうよ！私だってやれば出来るのよ！これでも子供には見えな
いでしょ」

「ええ、そうですね。ナツキ様は立派なレディーです。・・・私を
誘惑するなんて、イケナイお方だ」

「ぎゃあああああ！！ちよ、ゼノン手！手！！どこ触ってるのよバ
カアアアア！！！」

やっぱりナツはナツだ。

ゼノンの手から逃れるように、何重にも重なったレースの重さなど意図せず素早い動きで僕の後ろに隠れた。

「ルー変態がセクハラする！！」

「後でゼノンにメッてするから安心して」

ヨシヨシと結われた髪を崩さないように撫でながらそう言つと、若干ゼノンは顔を青くしたが知らない。

僕のモノに触れる方が悪いんだよ。

そんなゼノンには気付かず、ナツはナツで後ろから僕の髪に顔を埋めながら「私にもメッてしてー」と頬を寄せて甘えてくる。

ナツのお願いだったら何だって聞いてあげる。少し待っててね。

しかしそんなナツも身体はやはりまだ人間で。

やっぱりあの契約は完了するまでに時間が掛かるのが難点だな。

人と魔は姿形は似ていても根本的に全く違う存在だ。一から細胞を壊し作り上げていき、完全に身体が魔の者に成り替わった時、初めて契約は完了する。

だからそれまではまだ人としての部分が強く出てしまい、中々身体が安定せず突然体調を崩してしまうことがあった。

今回の場合も半分はそれが原因だ。

式典が終わるまでは元気だったものの、ナツはその日の夜は熱を出し寝込んでしまった。

いつものなら元からある膨大な力で多少はカバー出来たんだろうけど、今回は式の途中で血を流し過ぎたのと結果的に二重契約を結んだ所為か、過度な負担が一気に掛かり自己回復力では間に合わない

かったのだろう。部屋に戻るなり倒れてしまった。

ぐったりと寝台に横たわるナツ。

ゴメンね？無理矢理契約を結ばせて。

ナツは火照った顔を枕に押し付け、

「結婚初夜なのに・・・結婚初夜なのに・・・！」

恨めしそうに嘆いてた。

うん、熱が下がったらいっぱいイイコトしようね。

その後もあまり僕達の表面上は何も変わらなかったと思う。

ああ、挨拶のちゅーが増えたかな。

毎朝誰かしらに邪魔されながらも懸命に「夫婦の嗜みだああ！」
と言って頑張るナツはとっても可愛い。

昼間は執務があるから別々に過ごすことが多かったけど、時間の
合間を見て会いに行ったり出来るだけ一緒に食事は取るようにした。
その間身体はずっと幼体のまま。

どうやらナツはあまり成人姿の男が好みではないらしい。

柔らかな膝の上が僕の定位置になりつつあるんだけど、僕が本
当は成体に近い姿になれると知ったらナツはどうするだろう？

たまたま出会った日は幼体でいたが、普段は成体形に近い容姿で
過ごし、執務を熟すことの方が多かった。

大きくなれると分かったら、もう抱っこはしてくれないのかな？

・・・それはヤダな。

でもこの身体じゃあナツと交わることが出来ない。

いや、満たして上げようと思えば幾らでも方法はあるけど、やっぱり男としては僕のモノを入れて抱き締めて上げたいし。

けど膝も捨て難い。

これをもつぱら最近の僕の悩みだったりする。

あと悩みと言えば、四方を治める公爵達もそうだ。

何かと時間を見つけてはナツの寵愛を得ようとしているし、特に

西の公爵　カルディアはナツにべったり。

始めはナツを嫌悪するカルディアを危惧していたが、今じゃそんな片鱗は見せず、結構な頻度でお茶会と称して会いに来ている。

まあ馬鹿な貴族を追い払ってくれてるからいいけど。

僕と結婚したことでナツはこの国の妃になった。

異世界から来たナツには勿論この世界に知り合いなど居るはずもない。

その事を知ってか、何の後ろ盾のない彼女を取り得てその力を独占しようと思つて躍起になって貴族達が群がった。

双黒の王妃と繋がりがあれば社交の場でも優位に立てるし、周りに牽制も出来る。

そして寵愛を得て、その力を一身に注いで貰えば一気に公爵まで上り詰めれると思つたのだろう。

しかし幾ら貢物を宛がい面会を乞おうとも、ナツはそれらを一切無視し誰とも会おうとしなかった。

ナツ曰く、どの世界でも権力者って言うのは自己利益者ばかりで人を人とは思っていない。

ただの駒として扱うその姿勢がナツは好きじゃないんだって。

・・・何も言えない。

力主義の魔族にとつてはそれは当たり前前で、ある種の本能だ。利用出来るものは何だつて利用するし、力ある者以外には従わない。自分以外は皆ただの道具。不要となれば切り捨てればいい。

けど、どうしよう。

それを正直にナツに言うのは憚れるし、僕もそんなヤツだと思われて嫌われたくない。（実際はそうだけど）

そんな僕の葛藤を他所にナツは苦笑し、

「・・・でも、一国の王妃様になったらそんなこと言ってられないよね。今まで貴族とか権力とかと無縁な生活をしていたからよく分からないけど、上に立つ人間っていうのは貴族同士のラインも大切にしなきゃいけないんだよね。私人人としての感情よりも国の事を一番に考えなくちゃいけない。私ルーの奥さんとしては失格かな」

悲しそうに話すナツに胸が締め付けられるようだった。

「うつん、ナツは僕の側に居てくれるだけでいい」

寧ろそれだけが良い。

誰にも会わず、ずっとずっと僕の事だけ考えてくれれば良いのに。

その次の日からナツは意を決したように面会を受け付けるようになった。

ただし、その見た目が“愛らしい”と分類される者だけ。幼体の者が小さな身体を寄せ合い、ナツの前に座っていた。

.....。

ナツは自分にとっても正直だと思う。

そう言うところははすごく魔族っぽいよね。

しかもいくら見目が良くても強欲・傲慢といった性質の輩は嗅ぎ分けて、純粹に好意を抱いている者だけを選びすぐっているみたいだし。不埒な感情が見えればすぐに距離を置こうとする。

うん、獣並みの嗅覚の良さだ。

相変わらず成体系の男は皆断っているようだし、カルディアとメアリーが側に付いているから大丈夫だろう。

不敬な者が居れば速攻喰い殺すはずだ。

暫くは様子を見よう。

「ナツキ様との御契約が完了するまであと期間はどのくらいなんですか？」

「うーん、あと二ヶ月ってとこかな。」

本当はもう少し掛かるはずなんだけど、少しでも早く僕に馴染むよう、ナツの食事には少量ずつ僕の血を混ぜている。

今のところ拒否反応も出てないし、このまま順調にいけばもっと早まるかもしれない。

ああ、早くこの手でナツを抱きたいよ。

身体が不安定な今、一つに交わることは出来ない。

不用意に抱いて体内のバランスが狂って影響が出たら元も子もないからね。

完全に魔に染められるまで待ち遠しい。

「今度夢への介入があたり僕に回して。僕もご挨拶がしたいから」

「心得まして。魔王陛下」

ゼノンの手から球を取る。

バキッ

力を籠めたら中の頭は潰れ球が真っ赤に染まった。

これは“本体”も死んだな。

ナツに手を出すなんて許さない。

だってナツは僕のもの。

誰にも渡さない。

僕の知らない所でナツに近づこうとするなんて、メッてしなきゃ。

可愛い可愛い僕の奥さん

浮気は許さないからね？

旦那様の憂鬱（後書き）

次回からは40000〜50000文字を目安に更新していこうと思います。

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5987x/>

愛しの魔王様

2011年11月1日03時04分発行